れればそのとおりであり、私も半ば復学をあきらめる気持ちにもなっていた。だが、両親と妹たちは、「後は何とかするので勉強しなさい」と、受験を勧めてくれた。その気持ちは非常に嬉しく感謝したが、さてこれから受験勉強をするにも本も無い。希望校は京都大学だったが、汽車の切符も割り当て制で入手できない。それに何よりも肝心な汽車賃も無い。すると父は、黙ったまま自分のリュックサックから背広を出して、「一緒についてこい！」と言って外に出た。父はその背広を古着屋に売り、汽車賃だと言って渡してくれた。嬉しかった。涙が出た。と共に今の境遇が情けなかった。

十六　復学

いろいろと考えた末に、新潟医大を希望することとした。新潟医大の教務部長が、「戦争が終わり、今までの短縮された教育制度は、正規の教育に戻る。医学部は四年制、医専は五年制になり、更に卒業後一年間のインターンがあり、それから国家試験に合格して、初めて医師となれるのだ。これからの医師は、みんな正規の教育を受けて世に出ることとなる。アメリカ医学が入り、医学は進歩する。今までの教育では駄目だ。新しい時代に生きていける医師になるために一年生からやり直せ」と言われた。私はその言葉に従って、一年生を受験し無事に合格した。しかし生活するためには、昼間は学校で学び、夜間と土日は働くという生活が始まった。長岡にいる家族も苦しい毎日の生活を頑張っているのだと思いながら、私も頑張った。苦しいが、夢が出てきた。こうして復学の第一歩を、だれ一人知る者もいない新潟の地で、無い無いづくしの生活が始まった。

夢と懺悔（ざんげ）の開拓行

愛知県　清水　清

一　私の渡満事情

私は、昭和五（一九三〇）年八月、群馬県赤城山南麓で、自作農の清水圭太郎の四男として生まれまし

た。兄弟姉妹は十人でした。

私が父親と同じ道を継ぐために、分村開拓農民の一人として満州に渡ったのは、昭和十九年の春でした。歳は満十三歳、国民学校の高等科二年になっていました。太平洋戦争はいよいよ激烈を極めていましたが、国家のため、また天皇陛下のお役に立ちたいとの思いもあり、その後一年あまりに祖国の敗戦が迫っていたことなど知る由もなく、勇躍渡満しました。私が乗った輸送船に乗っていたのは大部分が兵隊たちで、いつ魚雷や機雷によって撃沈されてもよいように、完全装備のままであったので、私たちまで息苦しかったことをよく覚えています。

二　開拓団での生活

入植地は、吉林省磐石県第九次駅馬開拓団でした。生まれて初めて異民族の国に来て「ああこれでおれも国家のために働ける」と気持ちが高ぶっていましたが、今にして思えば、中国の人たちの心情など全く考えない、身勝手な軍国少年でありました。そのころはすでに、開拓地でも男は根こそぎ関東軍に動員されていて、私が頼っていた叔父も召集されていました。私は、男手が足りなくなった叔父の家で、農業の手伝いをしながら満州の国民学校に通いましたが、卒業してすぐの昭和二十年四月十五日、ハルビンの礎という所にあった満州国立基幹開拓農民訓練所の一期生として入所しました。同期の仲間は十五人でした。当時、礎と言われた所は現在の新香坊地区ですが、「満州開拓の礎になろう」という意味で命名された神聖な土地として、開拓関係者は誇りにしていました。近くにはハルビン飛行場や競馬場が、また明治三十七（一九〇四）年二月十日に始まった日露戦争で、東清鉄道の鉄橋爆破と軍用電話線切断の特別任務を果たした軍事探偵沖禎介・横川省三の忠霊塔、更に終戦になってから分かったことですが、「悪魔の飽食」として悪名高い石井四郎軍医中将率いる関東軍第七三一部隊が駐屯していた平房などがありました。第七三一部隊に所属する白衣を着た兵隊が、街に出て来て民家を訪ね、「日に一匹でも良いからネズミを捕まえてくれないか」と、頼んで歩いていたことを思い出します。細菌戦作

戦をやっていたことは敗戦後になって知りましたが、この部隊では敗戦後、連日昼夜を分かたず爆発音が絶えず、不思議に思っていましたが、証拠隠滅の爆破であったことが分かったのも敗戦後でした。

さて、満州各地から集まった私ども第一期生十五人が入所したのは、前にも書きましたように、満州国立基幹開拓農民訓練所でしたが、礎にはこの他に、義勇隊教導訓練所と開拓指導員訓練所の併せて三つの訓練所がありました。内地でいえば内原訓練所の加藤完治先生たちが中心になって、国策として各県に造られた青年道場の外地版というべきものでありました。この三つの訓練所を統括する所長は、関東軍を退役した鹿児島出身の陸軍少将川原侃という人で、熱河作戦の鬼将軍として有名でした。私ども基幹開拓訓練所の副所長は、有名な第一次弥栄の元団長山崎芳雄さんでした。私たちはこの基幹開拓訓練所で、父祖の教えに従って王道楽土建設に励んでいましたが、四ヵ月後の八月十五日に敗戦を迎えました。

三　敗戦後

敗戦後一年以上にわたっての難民生活は、まさに地獄絵図そのものであり、同期の第一期生十五人のうち半数は、死亡または行方不明になっております。私自身は幸いにも昭和二十一年の秋、九州佐世保に上陸、夢にまで見た故郷に帰ることができましたが、極度の栄養失調で、その後数年間苦労しました。普通の人の二年遅れで地元の農学校に入れてもらい、更に三年遅れで十勝にある獣医学校で畜産技術を学ぶことができました。現在は、愛知県知多半島で牧場回りの獣医として働いております。

今、七十歳になっていろいろな事実を学んでみますと、苦労したのは、開拓引揚者ばかりではなく、東京大空襲、沖縄の玉砕、広島、長崎の原爆、そして最近の出来事では神戸を中心とした地震など、悲しい事件は個人にしても国家にしてもいろいろあります。自分たちだけが苦労したなどと思いあがることは押さえておりますが、国のためにと同じ思いで開拓にはせ参じた拓友たちが、若くして次々に倒れていった事実は、

やはり忘れることはできません。私ども三訓練所の生存者で組織する「礎会」は、平成十三（二〇〇一）年六月、ハルビンのかつての礎の地に、中国の人たちの了解を得て、拓友たちの墓を建立することができました。正しい歴史の認識のもと、亡き拓友の分までも、平和のために世界との友好に努力したいと願ったものでした。そのように、私もいろいろと困難な目に遭って引き揚げてきましたが、自分たちだけが苦労したのだという、思いあがった考えは毛頭持ってはおりませんし、持ちたくもありません。

私の父は、私より四年も前に、駅馬村に入植したのですが、それはそれは随分と苦労をしていました。九死に一生を得たような場面にも、度々遭遇しております。その苦労を『平和の礎』に書き残したいと、以前から私に話していましたので、私は「元気な今書いておかないと、いつ具合が悪くなるかもしれないよ！」と、書き残すことを勧めておりました。それで決心したらしく、気分のよいときには原稿用紙の前に座っていました。ときどき私にも見せていましたが、大体書き終わったころに病気になり亡くなりました。

私は、これは私たち家族の者に残した遺言のように思えてなりませんでした。そこで、私の引揚げ労苦はここまでにして、父がどんな思いをして開拓団員として満州の地に渡り、そしてどんな苦労をしたか、中国の人々とどんな関係にあったかなどを、現在の人々に知ってもらいたいと思いまして、父のことを書きました。

四　父 圭太郎の渡満まで

私の父親は清水圭太郎といい、満州開拓団の団長でした。

父が詠んだ詩があります。

「ひとすじにただひとすじに百姓に生きて
　生きて悔いなく果てんと思う」

父は、赤城山南麓の農家の長男として生まれ、義務教育を終えるとすぐに農業を手伝いました。父は農業を始めたこのころから、既に「人生とは何か」について悩んでいました。「農民は先祖代々、晴れても降っても朝から晩まで身を粉にして働いているのに、なぜ

こうも貧しさから抜けられないのか」という疑問が解けなかったのです。乱読と言われるほど本を読んだり、各種の講習やら講演会に出席したり、篤農と言われている古老を訪ねて教えを請うたといいます。

繭の値段が大暴落したのがきっかけになって、農業経済が恐慌の嵐に襲われた中で、農民一体となって「農村経済更正運動」が提唱されました。盛たくさんな実行項目が決議されましたが、その中の「農家簿記運動」が父の担当部門になりました。

父は、多くの仲間と長年の帳簿を調査した結果、次のようなことが判明しました。

一、慣行小作料が高い

二、金利が高い

三、営農規模が小さすぎる

の三点でありましたが、この中の営農規模の過小、いわゆる五反百姓というのは、日本農業の宿命とも言えるものでありました。

ときの広田内閣は、その七大国策の一つとして「二十ヵ年、百万戸、五百万人の大陸移住」を決定しました。長い間の農業恐慌によって、貧乏のどん底にあった農民には、「天からの恵み」のように聞こえたのももっとものことでありました。調査した簿記グループがその責任を全うすべきだということになって、父は昭和十二年と十三年の二回にわたって現地を視察し、当時村会議員として作成した「木瀬村分村計画書」が、村議会において満場一致で可決され、村の計画として実行されることになり、父がその責任者になりました。

父は、昭和十五年三月、指定された吉林省磐石県駅馬村に、志を同じくする二十二人と共に、第二次先遣隊員として入植しました。団の内輪もめが二年も続いたので、父が新しく団長に選ばれ、まず人事を刷新してから本格的活動に入りました。広大な大陸での酪農を目指して、母村木瀬村から乳牛二十七頭を移入するなど、営農に励みました。

五　敗戦後北軽井沢開拓

しかし、入植五年半で思いもしなかった敗戦を迎え、営々と築いた開拓の成果と、将来への夢は消えて

しまいました。満州国は崩壊、関東軍は敗退、父たち開拓農民は異国の地で難民となり、土賊の暴行略奪を受けました。その上悪疫、栄養失調で倒れる者が百三十四人を数える結果となりました。父は、祖国博多に上陸して行われた解団式の席上、「私がしっかりしなかったために、同志の皆様方にご苦労をおかけしました」と泣いてお詫びしたということでした。

父たちには祖国の山は緑濃く、川は青く美しく見えましたが、政治的にはマッカーサー占領軍の統制を受けていました。米国からの援助はありましたが、なお食糧は不足し、おびただしい失業者が町にあふれていました。一方、空襲で廃墟と化した街の復興作業が始まり、活況を見せ始めていましたが、戦争犯罪者に対する厳しい裁判が行われたりして、国中がなんとなく騒然としていました。

こんな情勢の中で、国が主体となって「国内緊急開拓事業」が進められました。そして父たちに与えられた入植地は、標高一千メートルを越える寒冷な高地で、広さは千二百ヘクタールと広大でしたが、土地は養分の痩せた浅間山系の火山灰地帯でありました。ここは、かつては北白川宮牧場でありましたが、四十年の長期にわたって荒れるに任された、通称「六里ヶ原」であります。ここに入植した人は、大部分が復員軍人、満蒙からの引揚者、東京など都市での罹災者、失業者でした。そして肉親を亡くしたり、資産を無くしたりした戦争犠牲者でした。皆死の淵をさまような体験をした人々でした。共通しているのは皆無一物でありますが、親類縁者などの好意に甘えることを潔しとしない、自立精神の強い人々でありました。

全てゼロの状態から立ち上がろうとする入植者には、お互い助け合うことと一致団結することが要求されました。国の方針によって、集落ごとに「就農組合」が組織され、四戸に一頭の割合で和牛が貸与され、更に各戸に鍬一丁、鎌一丁と少量の肥料、種子が支給されました。何よりも、入植地に住まいを造らなければなりません。一戸あたり三千円の住宅補助金が支給されていましたので、まず、ナラなど雑木を伐採し、茂るくま笹を切り払って整地したあとに、共同宿

舎を造りました。でき上がった建物は、乞食が住むのかと思うほど粗末なものでした。そしてわずかな配給食を食べながら、与えられた農具と資材で農作業を続けました。

入植一年目の収穫は、ジャガイモ、小麦、トウモロコシ、粟などがほんの少しずつでしたが、皆で取り入れを終え、周りの山々が美しく紅葉した秋祭りの日に、皆で一杯ずつ飲んだ配給酒のうまさは、終生忘れられないと思いました。頑張れば何とかなる。皆そう思ったそうです。こうして、父たちが骨を埋める地が決まりました。あとは強く生き抜くために、組合をどう育てていくか、どう頑張るか、それだけが問題でした。

GHQの主導で制定された「農地解放」と「農地法」は、我々に勇気と自信を与えてくれた最大の恵みでありました。

昭和二十三年六月、待望の北軽井沢開拓農業協同組合の設立許可が下り、いよいよ本格的な村づくりに取り掛かりましたが、入植者の前歴がまちまちであること、入植時期が違うこと、適地再調査によって入植地区が変わったこと、公共施設が火災で焼失したこと、台風や冷害など天災がしばしば起こったことなどが災いして、事業の進展は必ずしも順調とは言えませんでした。父は自分の非力と不徳によると反省する一方、国、県、町の担当職員の指導を受け、組合員から選ばれた役員を中心に職員方の努力、組合員皆さんのご協力を戴いたことについて、心から感謝申し上げていました。

六　父の人生回顧と慰霊の旅

人生は　夢に始まり
　　懺悔に終わる

これは父が尊敬している友人が言った言葉であります。父も八十四歳を超えた老人になってその足跡を顧みれば、それは遠く永いものでありました。父がまだ若かったときは北海道開拓を考えていたようですが、長男という立場がそれを許さなかったようでした。農業簿記を広める運動を始めて十年、その論理を実現するために、箱庭的な狭苦しい日本農業から脱却するた

めに命をかけようと、志を同じくする人々と共に満州の広い天地にその場所を求めることになったようです。

「五族協和」「農による楽土建設」というスローガンは、広い土地を求めて止まない人たちの情熱を傾けさせるのに十分だったようです。村長に代わって、理想を果たすために大陸に渡ったのは、父が四十五歳のときでしたが、結果的には理想を果たすどころか敗戦という事実を迎えて、五ヵ年あまりにわたる努力と辛苦は一朝の夢と消えたのです。しかし、父は一年間の難民生活中に、国境を越えた人間の深い愛を体験しました。暴徒の捕虜になった婦女子の身代わりになって処刑されようとしたところを、中国人の愛情によって一命を助けられたのでした。

ある年の三月、某新聞が「旧満州へ悲願の慰霊団」という見出しで、厚生大臣を団長とする遺族代表一行七人が中国東北地区の瀋陽、長春、ハルビンを訪れ、それぞれの地で追悼式を行うことを報じました。現地で追悼慰霊を行うことは、父たちにとって三十五年前からの悲願でありました。旧満州で敗戦を迎えた混乱の中で、多くの人が親子、兄弟、友人を亡くしました。また自分自身が生きていくのに精いっぱいで、老人、幼児、病人など、弱い肉親をまるで捨てるように、中国に残留させてきた人が多かったのです。このような体験を持つ人たちにとって、この報道は、長い間胸の奥につかえていたものが取れたような思いがあったようです。

七　不安を吹き飛ばす大歓迎

父は、この国家間の話し合いによる公的な慰霊に先立って、仲間とハルビンを訪れ、中国の友だちにも会ったり、懐かしい開拓地のあとを訪れることができました。また、数千人の開拓民が命を落としたといわれる開拓基幹訓練所の跡地で、ささやかながら真心込めた慰霊の行事を執り行うこともできたそうです。この一行は、群馬県日中友好協会の熱意で編成され、「群馬県開拓者訪中団」と命名されました。顔ぶれは、かつて中国の東北地区を第二の故郷として土に生き、土に死のうと誓った者たちでした。その大半は日本に

帰国後も開拓団に入り、今も農業一筋に生きている人たちです。具体的な内訳は、元満州開拓団員二十七人、元開拓義勇隊員八人、元満鉄自警村農民二人、ほかに元満州国開拓関係官吏一人、日中友好協会、旅行社関係の人、総勢四十一人でした。中国旅行総社の方々が付き添ってくれたそうです。

父たち一行が中国の首都北京で一泊して、ハルビン空港に着いたのは、昨年の九月十三日午後でありました。ハルビンには亡命ロシア人が多く住んでいて、ロシア人が信仰するロシア正教のドーム型寺院が目立つ美しい街でした。そして、北満に入植した日本人たちが交流する中心地になっていて、開拓団基幹農民訓練所が設置されていました。

空港を出て都心に向かう途中、一面に広がる畑を見て「あっ、コウリャンだ」と皆が口々に叫びました。この背高く生えているコウリャン畑の遙か彼方に沈む大きな真っ赤な夕陽は、満州に住んだ者にとって忘れることのできない景色として瞼に焼き付いているのです。一行はコウリャン畑を背景に、夢中になって記念写真を撮りました。父は、その様子を見て彼らの心情を思いやり、思わず目頭が熱くなったといいます。

ハルビン市内の「和平村賓館」が、父たちの宿になりました。ここは、日本人の少女が勉強した富士高女の跡だということでした。清潔な賓館にくつろいでまず思ったことは、父たち訪中団が、開拓跡地で亡くなった肉親や仲間に、線香の一本でも手向けることが許されるかどうかということでありました。開拓地は都市から四十キロメートルほど離れていて、観光ルートに入っていませんでしたから、特別に許可が必要だったのです。

父たちは恵まれていました。要望が全部認められたわけではありませんが、その夜遅く、吉林省磐石県の改革委員会は、県下三ヵ所の開拓地と、そのほか思いも掛けなかったハルビン訓練所と、ハルビン南郊の元鉄道自警村五家への立ち入りを許可する旨を伝えてきました。磐石県には、群馬県出身者が開設した駅馬、報馬、煙筒山と呼ぶ三つの開拓団がありました。その一つ、駅馬開拓団は、父が団長として営々六年にわ

たって村づくりに汗を流した所でした。あの駅馬に、もう一度行くことができるのだと知ったとき、その晩は眠れませんでした。五家は父の弟の六郎がいた所でしたし、同行の笹反さんは、現にその村の一員だったばかりでなく、三人の愛児が眠っている所でもありました。

一日おいて、父たちは現在人民公社の生産隊になっている五家を訪ねることになりましたが、ふと不安なことに思い及びました。今、五家にいる人たちにとって、我々日本の開拓民は心にくい存在だったはずでした。その日本人を、五家の人たちは快く迎えてくれるだろうかという点でありました。しかし、その不安はすぐに消えてしまいました。現地に着いてみて、父たちは目を見張ることになりました。村人が父たちが乗ったバスを取り囲み、降り立った一行を笑顔と歓声で迎えてくれたのです。人民公社の建物には、「熱烈歓迎群馬県開拓者訪中団」のまん幕まで張ってあったのです。それだけではありません。当時父たちと交際のあった人たちが、大勢の中から駆け出してきて、両手を振りながら父たちを迎えてくれ、お互いに歓声を上げて抱き合いました。そして一行の顔ぶれを見て、「田島はどうした」「福田はなぜ来なかったのだ」と、五家にいて親しかった日本人の名を呼んで懐かしむのでした。

五家で一番深い感激を味わったのは笹反さんだと思います。彼は自分が住んでいた家の裏手に行き、子供が眠っている場所に立って深く頭を垂れ、しばらく動きませんでした。そして、一握りの土を持って帰ることにしたようでした。笹反さんも、当時彼の家で働いていた老人と手を取り合って、お互い涙を流しながら話は尽きないようでありました。

八　ハルビン訓練所跡での慰霊

五家訪問を済ませ、ハルビン開拓基幹訓練所の跡地に向かいました。ハルビン開拓基幹訓練所は、ハルビンの中心街から南東へ、車で三十分ほどの新香坊という所にあります。父たちの一行がバスを降りたとき、日はもう暮れようとしていました。満州開拓の第一線の基地として威容を誇っていた大小の建物は無くな

り、わずかに残っていたのは赤レンガの病院だけでした。そして、辺りは一面のコウリャンとトウモロコシの畑でした。赤い夕陽を浴びたコウリャンとトウモロコシの葉が風に揺られてすれる音が、我々を迎えてすすり泣いているように聞こえました。

一行の誰もが、ここで亡くなった人たちのためにお線香をあげたい、持ってきたお菓子を供えたい、日本酒も持ってきている、これも捧げたいと思っていました。しかし、これまで中国は日本の慰霊団を受け入れていませんでした。思想と宗教観の違いもありますが、中国が一貫して言っていることは、「昨日のことは忘れましょう。明日のことを語りましょう」であります。互いに過去には触れたくないのが正直な心情でありましょう。慰霊も、中国にとっては過去に触れることの一つなのです。そのことは父たちもよく知っていましたが、今訓練所の跡地に立って、何もせずに帰ることはできませんでした。訪中団の幹事であった原田さんは、日本側の通訳として付き添ってきた群馬県日中友好協会の佐藤豊子さんを促し、中国旅行総社の呉文志さんに歩み寄って言いました。「ここは、私たちの肉親や多くの仲間が亡くなった所です。私たちは日本から線香と酒や水を持って来ています。慰霊をさせていただけないでしょうか」一瞬、呉文志さんの顔がこわばりました。しかし次の瞬間「いいでしょう」呉さんはそう言って優しい顔に戻りました。

コウリャン畑の片隅で火を焚き、持参した線香に火を移しました。日本酒、菓子、水、そして野菊を供え、父は胸の奥から噴き出してくる思いを絞り出すように読経しました。父が駅馬開拓団長のとき、警備指導員として父を助けてくれた石井さんが唱和しました。同行した三十八人の元開拓団員は、二人を囲んで合掌し、中にはすすり泣く人もいました。香煙は静かに流れて、背高いコウリャンの穂をかすめ、まさに暮れようとする空に消えて行きました。読経が終わり、父も一行の者も、これで旅の目的の大半が果たせたとほっとしたことと思います。

九　小川さん、残留家族と涙の再会

父たち一行は、今ひとつの大きな目的である開拓地

入りを果たすために、ハルビン市をあとにして吉林市に移動することになりました。吉林市に着いたのは、夜七時を過ぎていました。列車がホームに滑り込み停車すると同時に、「お父さん」と叫びながら父たち一行の乗っている車両に駆け寄ってきた女性の一群がいました。一行の小川さんが中国に残した娘さんたちでした。小川さんは報馬開拓団の一員でしたが、昭和二十年の五月、関東軍の根こそぎ動員で、奥さんと三人の娘さんたちを残して召集されました。それっきりこの一家は、今日まで再開の機会を与えられませんでした。小川さんはそのままシベリアに抑留され、奥さんと娘さん三人は現地に残留して今日に至ったのです。デッキに降りた小川さんは、娘さん三人とひしと抱きあい、ただ泣くばかりでした。それを見守る私たちも、もらい泣きしました。敗戦の悲劇は今もなお消えていなかったのです。

吉林は松花江（ショウカコウ）沿いの街で、京都に似た古い都で景勝の地であります。父は、敗戦から一年あまりたってやっと日本に引き揚げる命令が出て、生き返ったような気持ちで集結したのがこの街でした。そして八路軍に徴用されていた我が娘と巡り会ったのもこの街ですから、父にとっては忘れられない所であります。

宿舎で旅装を解き、翌早朝バス三台を連ねて磐石県を目指しました。吉林から磐石県まで二百五十キロメートルあります。舗装していない道を、砂煙を巻き上げながら走りました。途中、道路端にジープが三台停車していました。磐石県の革命委員会副主任と配下の人々が、父たちを迎えに出てくれたのでした。ジープの先導で、まず磐石県の中都市煙筒山の街に入ると、ここでも父たちを歓迎する人波で埋まり、頭上には「熱烈歓迎群馬県開拓者訪中団」と書かれた横断幕が張られていました。父たちは、こんなに歓迎されて戸惑うばかりだったということです。やがて革命委員会の接待所で、山海の珍味を揃えた心からの接待を受けました。

ここで父たちは、開拓団別に三班に分かれて行動することになりました。まず、煙筒山から四十キロメートルはある報馬組が出発しました。報馬組は群馬県榛

名山のふもと、相馬村の人々が入植した場所でした。吉林の駅で、娘たちと涙の再会をした小川さんはこの組でした。

十　父、命の恩人との再会に号泣

報馬組が出発してまもなく、父たちの駅馬組、そして煙筒山組が続いて出発しました。煙筒山開拓団は名のとおり、煙筒山の街から幾らも離れていない牛心頂子（ギュウシンチョウシ）というところに団本部がありました。駅馬は、煙筒山から東へ三十キロメートルあまりはありました。舗装されていませんが、道路は実によく整備されていました。副県長の説明によると、父たちが来訪するというので、この近くの村人が総出で三日間も道路整備をしたということで、恐縮の他ありませんでした。更に注意してみると、周囲の風景が昔とは大分変わっていました。かつてこの辺は、ヤン草の茂る湿地帯でしたが、今では立派な水田になり、黄色く熟した水稲の穂が風に吹かれて波打っていました。当時、水稲は日本の開拓団でもいくらかは作っていましたが、主に朝鮮系の移住者が作り、現地住民はほとんど作っていませんでした。しかも、あぜには大豆を植えているのです。まるで日本の田園風景です。そのことを副県長に告げると、「そうでしょう。これはあなた方が置いていってくれた遺産ですよ。昔、あなた方がやっていたことを見習ってそのまま作っているんですよ」と言われました。文化は交流し、受け継がれるものなのです。それにしても今の日本はどうしたのでしょう。水田はつぶされ、あぜに大豆を見ることもほとんど無くなってしまいました。

そんなことを考えているうちに、車は飲馬川の川岸に出ました。ここにいたときには、何度この川岸をたどって県公署のある磐石へ出掛けたことでしょう。この川の先には、父たちが駅馬開拓団の本部を設置した、泊子という集落があります。

やがて、車は煙筒山開拓団本部があった、牛心頂子に着きました。煙筒山開拓団は、昭和十三年以降、群馬県一円から応募してきた移住希望者が入植した所で、父たちにとって生涯忘れることのできない場所でありました。

昭和二十年八月二十日、父は駅馬に居住していたすべての団員とその家族を団本部に集めました。状況はいよいよ不穏で、もう一刻も駅馬にとどまることを許されなくなっていました。育ててきた農作物、手塩にかけて飼ってきた家畜、家具、農具などすべてを捨て、父が先頭にたって、ほとんど老人、女子供の六百人あまりを引き連れて、煙筒山駅を目指して歩き始めました。何はともあれ、日本に引き揚げるためには汽車に乗らなければならないのです。ところが、駅馬を出て右の道は煙筒山に、左へ曲がれば石砠子を通って磐石駅へという三叉路にさしかかったときに、銃で武装した数十人の暴徒に襲われたのです。

彼らは無防備の避難民の群に、容赦なく銃弾を撃ち込んできました。一行は算を乱して逃げ散りましたが及ばず、死傷者が辺り一帯に倒れる無残な修羅場となりました。父たちの避難民一行の群は、反対方向の石砠子の方へ逃げようとしましたが、動きの早い敵に退路を断たれて敵に捕えられた婦女子がかなりいたのです。父は、それらの人たちを見捨てるわけにはいきませんでした。敵の副隊長らしい男と交渉し、自分が身代わりとして人質になって、捕らわれていた人たちを解放してもらったとのことでした。そして牛心頂子に連行されて、その翌朝処刑されることになり、開拓団の裝蹄所だった建物の一室に拘禁されました。翌朝、裝蹄所の処刑場はこの騒ぎを聞いて集まってきた群衆でいっぱいになりました。いよいよというそのときでした。集まっている群衆の中から一人の中国人が飛び出してきて、「チンスイトンジャン、シンデテンホー、スーラメーヨウ！」と中国語で叫びました。「清水団長は、心のよい人だ。殺してはいけない！」と言っているのでした。父がふとその男を見ると、開拓団で雇っていた苦力頭（クーリー頭）の韓慶雲でした。韓慶雲の叫び声に、周りの群集は一瞬声を潜めてしまったが、すぐに「清水を殺すな！」「清水を殺すな！」という大声が響きわたったそうで、結局、父は処刑されずに解放されたのでした。死に臨んだぎりぎりの状態で助けられた、そんな思い出のある牛心頂子を訪れて、感無量の思いで人民公社の人々の心温まる接待を

受けていました。

そんなときに、父はなにやら辺りが騒がしいのに気付きました。一人の男が部屋に入ってきて、父の前に立ちました。「あっ、韓慶雲だ！」父はそう叫んで、彼の肩を抱き寄せました。お互い抱き合いながら声を上げて泣き出すまでに、それほどの時間はかかりませんでした。二人は泣き止みませんでした。父は、命の恩人の顔をはっきりと覚えていたのです。父は八十五歳になる今日まで、人前で泣いたことはありませんでしたが、こんなに泣いたのは初めてでした。これも皆中国側の深い配慮のお陰でした。こういう配慮が、中国との暗い過去を一つ一つ洗い清めてくれるのだと父は痛感したと言いました。

このあと、父は現在駅馬人民公社になっている開拓地跡、駅馬泊子に行き、ここでも大歓迎を受けました。当時、駅馬五山と呼んでいた山々を眺めたり、自分たちの子供のために建てた国民学校がそのまま残され、中国の子供たちがそこで学んでいることを知りました。

今は、共に群馬県長野原町の北軽井沢開拓地で農業に励む、団員の半沢君、徳間君、桐淵君らも、かつて新婚生活を過ごしたりした旧宅を訪ねたり、旧知と会ったり、皆心にしみることばかりだったようです。

我々はこうして深い感激に包まれた十二日間の旅を終え、無事帰国しました。

父が書いていた労苦記録はここで終わっていますが、あの開拓団時代のこと、そして団長として重い責任を持って団員家族を引き連れての逃避行、引き揚げて来てからの生活再建などの苦労は、それをすべて知っているがため余計に生々しく、身にしみて感じられるのです。

十一　結び

かつての開拓団の跡地への慰霊訪問において、訪問団は中国側と約束を一つとり結んできました。それは、お世話になった黒龍江省から、たとえ数人でもよいから現地の農業従事者を日本に招待して、日本の農業を学んでもらうということでした。こうしたことが日中友好の絆になると考えたからで、その計画は着々

と実行に移されて、毎年、数人ずつの中国の人が、群馬県を訪れています。日中永久の親睦はこういうことから始まり、これがだんだんと実を結んで大きな絆になると、私たちは信じて実行しています。

終戦後、私たち一家は土に生きる喜びと幸せを求めて、再びこの火の山のふもとに帰り、やせ衰えた荒野に鍬を振ってから、すでに五十数年が過ぎてしまいましたが、ここ赤城山のふもとの開拓でも、厳しい開墾作業とそれをあざけり笑うがごとき天災との戦いに疲れ果てて、かなりの拓友が死んでいきました。静かに冥福を祈るのみです。

また、生き残っている人々の顔にも辛苦のしわが深く刻まれてしまい、髪の毛も霜のごとくに白くなってしまった。しかし反面その顔には、成すべきことは全部果たしたという安らぎも見られます。

私たちが、ここに入植した当時に抱いていた理想や夢は、必ずしもその通り実現されておらず、残念な気持ちもなくはありませんが、五十数年かけて努力した「昨日」があり、平和の「今日」があります。

心身共にたくましく育ったであろう、二世、三世がいて、その顔は明るく瞳は輝いています。この後継者たる若者には、これからの世代を頑張ってもらい、「今日」という現実と「明日」という希望に対して、限りない期待をかけたい。村づくりには、「経過駅」はあっても、「終着駅」が無いことを肝に銘じて、命の限り、力の限り前進して欲しいと願うばかりです。

大正生まれの我が青春

兵庫県　神吉一夫

一　古き良き時代の大連

私は、大学に入るまではずっと大連で過ごしていた。大連の花街にあった割烹料亭が我が家であった。満州への玄関口であった大連は二十万都市で、「東洋のパリー」とも言われていた美しい都会であった。だれしも太平洋戦争の前途に暗雲が垂れ込めてきたころにおいても、大連の花街では平和な時代の日本風の正